

氏名(本籍)	野崎晃市(島根県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第3869号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	明治キリスト教の受容と変容－浅田栄次の目を通して－

主査	筑波大学教授	博士(文学)	塩尻和子
副査	筑波大学教授	文学博士	山中弘
副査	筑波大学教授	博士(文学)	津城寛文
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	桑原直己

論文の内容の要旨

本論文は、日本が諸外国の教育や科学を貧欲に取り入れて近代化に邁進した明治期のキリスト教史を、キリスト教の受容と躰き、偏向、離反などの事例を取り上げることによって、日本におけるキリスト教の展開と、その背後の問題点とを明らかにしたものである。これまで日本のキリスト教史は、教育や文化面の近代化に繋がる輝かしい側面が語られることがおおかただったが、成功者の足跡としてではなく、思想的危機や神学上の矛盾と直面した人々の苦悩を通して、明治期のキリスト教を捉えなおし、躰きの石がどこにあったのかということ明らかにしようとした。

このような意図のもとに、本論文では、日本人のキリスト教理解、とくにプロテスタントへの理解について、アメリカに留学してシカゴ大学初の博士号を取得し、帰国後は青山学院で教鞭をとった浅田栄次という人物に焦点をあて、彼のキリスト教理解と教会との確執を、残された論文、講演録、私信などから丹念に掘り起こすことによって検討した。それと同時に、浅田の周辺にキリスト教に関連する同時代の思想家を配置し、キリスト教と教育、国家とキリスト教、フェミニズム問題、ユニテリアニズム、エスペラントと社会主義思想など、当時の思想界の風潮を、浅田との関わりにおいて、検討した。浅田というキリスト教者としては成功しなかった教育者の足跡を通すことによって、明治期キリスト教の枠組みの光と影を描き出そうとしたものである。

序章「浅田栄次の生涯」では浅田研究の方法と課題、生い立ち、キリスト教との出会い、アメリカ留学、青山学院神学部への就職までを扱っている。第一章「宗教と教育」では、後に同志社を拓くことになる新島襄と日本の近代化にキリスト教を利用しようとした福沢諭吉の足跡と思想を対比的に概観した。さらに、井上哲次郎と植村正久との「教育と宗教の衝突」をめぐる論争を追い、ついで浅田栄次の教育観を取り上げ、科学的思想とキリスト教神学の一致という観点から学生の道徳教育における宗教の必要性の主張が検討される。第二章「谷本富批判」では、谷本の「耶蘇教駁議」を中心にして浅田の谷本富批判を検討している。浅田は井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」とともに谷本の「耶蘇教駁議」を批判しているが、ここで論じられている「高等批評」とは聖書の歴史的・文献学的研究を科学的な方法で行ない再検討するというものである。

浅田もアメリカで合理的の神学思想を学んできており、浅田自身もやがて「高等批評」を擁護したとして青山学院神学部から排除されることになる。第三章『『日本の花嫁』事件と婦人矯風会運動』では浅田の旧友が出版した『日本の花嫁』に付随したキリスト教会の女性観を中心に議論が展開され、浅田自身も伝統的な女性観・家庭観を主張していたことが明らかにされる。第四章「ユニテリアニズム」では浅田とユニテリアニズムとの関連が検討され、ユニテリアニズムが生み出した東西宗教の融合という課題を浅田が評価しながらも、自らはユニテリアニズムに参加しなかった理由が語られている。ここではユニテリアニズムと村井知至、平井金三、フェノロサとの関係が明らかにされている。第五章「エスペラント」では、エスペラント活動をとおして浅田が大杉栄やロシアの詩人エロシエンコと交流したことが描かれ、エスペラントが浅田にとって最後のよりどころであったことが明らかになる。結論では、浅田のキリスト教理解の変容の原因が、明治期の日本が近代国家として成立していく、まさにその過程の中の社会的変容にあったのではないかと結論づけている。

浅田栄次のような、これまで武士として育てられた青年たちが、明治維新によってあらたな道を模索する過程で、キリスト教と出会い、国家の近代化政策の波に乗ってアメリカへ留学して近代的な思想を持ち帰る一方で、帰国後の彼らを待っていた国家主義のうねりに翻弄される過程からは、これまであまり明らかにされることがなかった明治期の日本のキリスト教がたどった「光と影」が見えてくるのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまで日本のキリスト教史がともすれば避けてきた陰の部分にあえて焦点を当てて、明治期のキリスト教と教会とが抱えていた矛盾や偽善を見つめなおし、改めて日本のキリスト教理解を問い直すという問題提起をしたものとして、たかく評価される。とくに、近代化の担い手として、アメリカ留学を成し遂げ、しかもシカゴ大学神学部で旧約聖書研究において第一期の学位取得者となって帰国した浅田栄次が、帰国後まもなくその華々しい経歴を自ら放棄し、東京外国語大学の前身校で英語教師としての生涯を終えることになる過程には、当時の日本の近代化の問題とキリスト教界の矛盾とのなかで苦悩し挫折する一人の聖書学者の姿が浮かび上がる。このような浅田の足跡を通して、近代化に邁進した明治期の社会や教育を検討しなおすことは、今日、ふたたび問われている21世紀の日本という国家のあり方にも繋がってくる。そういう意味では、今後の研究課題をおおく提示した独自性のある論文となっている。

しかし、このような明治期キリスト教史の「光と影」を追求する論文としては、光と影の枠組みが曖昧であり、当時の日本キリスト教思想が近代化という波のなかでどのような展開をしてきたのかという問題が、十分には明らかにされていない。当時のキリスト者のなかには、国家主義を受け入れる人々や、逆に国家主義からはじかれる思想家たちがあり、個人と国家と関係においてもさらに追求していくことが求められる。また当時の日本で宣教した伝道師たちに関しても、アメリカ型のキリスト教とヨーロッパ型のキリスト教とでは、科学や社会との関係においても大きな違いがある点も、見逃されている。とくに、価値観の多様性を求めて活動した日本のユニテリアンの思想は、当時の宗教問題や国家主義などについても重要な要素であり、浅田栄次との関連のなかで、さらに追及するべきであった。

以上のような問題点や今後の課題があるが、著者が『東京外国語大学史』の編纂作業の過程で知ることになった浅田栄次の業績を丹念にほりおこし、彼を通じて、これまでほとんど見捨てられてきた明治期キリスト教史の先駆者たちの思想や挫折に光を当てたことは、日本のキリスト教を考察する上で、高く評価されるものである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。